
気ままに行こう！ ss-1 24,000の瞳

空魚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

気ままに行こう！ SS - 1 24,000の瞳

【Nコード】

N9165X

【作者名】

空魚

【あらすじ】

マリンの依頼をこなした後、海炎で息抜きをすることにしたレン。イーグルに手渡された紹介状を頼りに夜湖やこの屋敷を尋ねた。ところが人形マニアと鉱物マニアの兄弟の争いに巻き込まれてしま
い！？

プロローグ

色とりどりの花の切り紙で作られた飾りが、通りに面した茶店や漬物屋などの商店街の軒下にぶら下がっている。道行く人はそれぞれローブのような裾の長い服を着たり、それと長ズボンを組み合わせていたり、チャイナドレスを着ていたりする。お姉さま方の髪は大体が黒で、長く伸ばしたものを頭の上で一つないし二つにまとめ、お団子状にしていた。

「海炎かいえんかあ……」

そう、今わたしがいるのはこの世界ファーズックの東の大陸にある、カジャル海に面した大国海炎の都、夏かである。お国柄はのんびり、おっとりとしたもの。その最たるものが音楽で、竹の節やら鉄やらで作られた笙、龍笛、銅鑼などで演奏される曲にはついつい瞼が下がってきてしまうと聞く。まあ、そういうものばかりでもないとは思っただけだ。

あ、紹介がまだだった。わたしの名前はレン＝シユミット。十六歳の賞金稼ぎだ。紺の髪は最近ちよつと長くなってきて、肩にかかってくるくらいになっている。そろそろまとめようか目下検討中。髪とは対照的な淡いハシバミ色の瞳は結構大きいのだけれど、はつきり言っただけで幼く見られて困りものだったりする。背はそんなに高くはない。だからといってチビとか言われるのは嫌いだ。

というのも、賞金稼ぎという職業柄、あまり外見が子どもっぽいと依頼を断られることがあるためである。外見で判断するような奴の依頼は本来受けたくもないが、背に腹は代えられないというのがホントのところ。今はガルディナから受け取った報奨金もあって、食う寝るには困らなくなっただけだ。

って、所帯じみた話は置いて、何故この国にいるかと言うとそれは単に息抜きだったりする。最近立て続けに仕事をこなしていたし、とある知り合いからもらった紹介状もあったしね。

「レーン、あつちで曲芸やってるよ？ 二人で見に行こ」
わたしが物珍しげに周りの様子を眺めていたら、右隣りにいた男がにっこり笑って話しかけてきた。

指差された先にはそこまで人の体って曲がるものなのか？ と思うほど上体を逸らした奇怪な格好をした人が両手に細い棒を持ち、皿回しをしていた。

「ね？ ほら、面白そうでしょ」

にこにここと人の良い笑みを浮かべるこの男、名前をハルディクス、通称ハーディーという。少し長めのサラサラな黒髪と不思議な深みを持つオニキスの瞳の持ち主だ。性格に難ありだが、顔だけはいい魔王と互角、いや、それ以上の力を持ちながらも、歴史に姿を一切現さない謎に満ちた存在だったりする。どうやらわたしのことを気に入っているらしいが、別に恋人という訳ではない。

「嬢ちゃん、ハルディクスなんかと大道芸を見るくらいなら、こっちの茶屋によつて一服しないか？ 仕事ばかりで疲れただろう？」

で、ご機嫌を取るかのようにそう言ったのが左手にいる男、ゼン。針金のように堅くツンツンした短い白銀の髪に、枸杞の実のように赤い瞳をしている。鍛えられた体は深紅の全身鎧で覆われていた。顔は精悍なんだけど表情はイマイチ頼りない。

「ハーディー、ゼン。わたしは確かに余暇を楽しむために海炎にきたわ。でも、あんた達に付き合うためにこの国に来たんじゃないの」
わたしは少し首をかしげた二人に対し、イタズラっぽくニツと笑った。

「と言うわけで、行きたければ二人で行ったら？ 日頃の確執、いくらか和らぐんじゃない？」

「じゃーねー、と言ってわたしは人並みに紛れ込んで行った。

「レンちゃん……そんなあ」

「じよ、嬢ちゃん！？ 俺にこいつと茶を飲めなんて……」

二人の声が後ろから聞こえて来たけれど、きっぱりと無視してわたしは海炎の中心部へと歩いていった。

1・つぶ(さ)れた休暇

どれだけ歩いたかは覚えていないが、どうやらわたしは海炎の地理を甘く見過ぎていたことがわかってきた。暮盤の目のように入り組んだ路地はどこも似通っていて、初めてこの国を訪れた人間は大抵迷うのだということの後で聞いた。

「うーむ……」

ごみごみとした生活感の滲み出ている細い路地。こういうところを歩くのも結構楽しい。何しろ表向きの通りでは見られない、その国独自の匂いみたいなものが感じられるのだから。けれど、日中も薄暗いこういう路地は、罪人とかの溜まり場になっていることも多かったりする。

「オラオラオラオラアアアアアアア！」

……言わんこつぢやない。

割れた素焼きの茶碗やらが散乱するちょっと先のところから、野太い声と何かが壊れる音が断続して聞こえてきた。

「ちよーつと、見てみたいような……」

興味あるなあ……あ、いけない、いけない。今は骨休め中。無闇に関わって巻き込まれるような羽目になったら休養に来た意味がなくなるじゃないか。

「言えっ！ 奴はあれをどこに隠したんだっ」

……無視、しよう。うん、久しぶりの余暇を楽しむことを優先してどこが悪いのよ。

「知っいても誰がお前なんかにはしゃべるかよっ！」

いたぶられていると思われる男の声が聞こえてきたとき、抜き足差し足でその場からおさらばしてしまおうとしていたわたしの足は止まった。

「この声……」

聞き覚えがあった。口が悪くて、短気で、わたしよりちょっとだ

け背の高い同い年の男。髪、瞳はともにブラウン。額の急所を守るための鉄張りのバンダナに、チェーンアーマーを着込んだそいつの名は……

「イーグルじゃない。あんたこんなところでどーしたのよ？」
無視するのはやめて、わたしは彼等の会話に割り込んだ。

「レ、レ、レ……」

レレのおじさんか、お前は。

「レン＝シュミット」

組み敷かれるような形で、イーグルは覆面姿の男に攻撃用の長針の切っ先を突き付けられていた。覆面姿の男はわたしの出現に驚いたのか、ビクリ、とその切っ先を喉元からずらした。

「よくも……やってくれたな！」

イーグルがその隙に男の手から逃れる。そして自分も懐から刃渡り三寸くらいの短剣（柄の部分が一握りできるくらいの長さしかない。見たこともない武器だ）を取り出してそれを振るった。

「ムッ!？」

不意をつかれた男が困惑の声を上げる。形勢を逆転したイーグルは、男の口に手を当てると瞬時にその胸に刃を埋めた。そのまま、刃は抜かない。出血を押さえるためだろう。こんな町中を血を被った姿で歩けるわけがないからね。

「レン＝シュミット……お前、来たのか」

イーグルは男の屍を乗り越えるとそう言いながらわたしのほうに近寄って来た。

「二週間振りかしら。マリんに頼まれていた仕事も終わったし、せっかくこつちの大陸に戻って来たんだから、一回、顔出しておこうと思っただけ」

そう、前回仕事を頼まれていたのはマリンという魔女のお姉さんだった。その話を話を話し出すと色々時間がかかるから詳しい話は割愛させていただくことにする。

「そうか。そういえば……お前、ちょっと見ない間に随分と縮んだ

な

むっ!?

「ちゃんと食事、取ってんのか？ 背を高くするには牛の乳がいいぞうだぜ」

よ、余計なお世話だ！

「あんたが単に今まで小さかったただけでしょ!? 男のくせに」

「な、何だって!」

成長期が来たからって自慢なんかするんじゃないつ。いつかわたしだって……

「……つと、それどころじゃなかった。おい、夜湖やこん所に行こうとしてたんだろ？ こつちだ」

立ち話をしていたら、さっきの男の仲間と思われる複数の気配が近づいてきたので、イーグルがそんなことを言った。腹は立っていないけれどゴタゴタに巻き込まれるのは嫌だったから、とりあえずイーグルの指示に従った。

「あれ、何なのよ」

走りながら尋ねる。あの男のなり、どことなくイーグルの格好に近いものがあった。

「……日泉ひせひの密偵だ。詳しくは後で教える。この角を曲がったら行き止まりだ」

おいおい、追い詰められてどうすんのよ!

「心配ない。隠し通路があるんだ。向かって右側、一番奥に置いてある物の蓋を取って、見つからないようにその中に飛び込むんだ。時間がない。躊躇するなよ」

最後の方の台詞を、いやに真面目に言うイーグル。何か不安だ。角を曲がると、イーグルが言ったように行き止まりになっていた。そしてイーグルが「飛び込め」と言った所にあつたのは……

「ゴミ箱!? こんなとこに飛び込むわけ?」

思わず抗議の声を上げる。何しろそのゴミ箱と言ったら……カミソンの皮やらバナナの皮やらが引っ掛かっているのはまだ許せるとし

ても、何なのかわからない半透明なドロンとしたゼリー状の物質はくつついてるし、油のどす黒いネバネバした汚れはくつついてるし、臭いもすごい。

「躊躇するなつて言っただろ！」

イーグルは奴の方こそ、さも嫌そうな顔で促した。

「……………わがっただわよ」

仕方がないので、タライのような木製のゴミ箱の蓋を開ける。ネチヨオオオオ、と何かが糸を引いた。何が悲しくて休暇先でゴミ箱に入らにやいかんのだ。

左足からそこに身を埋める。ゴミ箱の中に直立した瞬間、足元にある地面が割れた。前にもこんなことがあったような気がするけど……………まあ、いいか。

「むうっ!？」

ゴミ箱の底の抜け道は坂になっていて、わたしは足を付く間もなくそこをスルスルと滑り落ちていった。徐々に先の方に明かりが見え始める。そろそろ終点か? と思ったところでいきなり段の下に落ちた。思いつきり尻餅を付き、わたしはすぐさま立ち上がってお尻をさすった。

ちよつと、これはないんじゃない? すごく痛かったんだけど。

「うわあっ!」

ちよつとそこにイーグルが突っ込んできた。わたしはその声に反応し、足払いを食らう直前にひょいとイーグルをよけた。けれど、よけたときにネチヨツとしたものが足に絡み付いてきたものだから、前のめりにこけそうになった。不審に思って全身を客観的に見てみる。と

「ちよつ……………何これ!? わっ、マントも!」

真っ白な鎧は胸の辺りに埋め込まれた紅玉もろとも被害に遭っていた。縮れた麺が石の出っ張りに引っ掛かり、卵の白身と思われるものが鎧のレザーの部分に付着してる。もっと酷いのが外套だ。さっきのネチャネチャ油がそこかしこにこびりつき異臭を放っていた。

「イーグル。あんたこの落とし前、どうつけてくれるつもりっ！」
こめかみをひくつかせながらわたしは言い放った。

「フン。悪かったな」

そっぽを向いて言うセリフか！

「そっちに風呂場がある。誰かに頼んで替わりの服は用意させてやるから、とりあえずその鎧とマント、脱げよ」

ぶっきらぼうに言うイーグル。それくらい当然だ。

「あ、でもこの鎧……」

言いかけて、ふと思いとどまった。

「ううん、何でもない。これ、あんたが何とかしてくれるの？」

「仕方ねえだろ」

ふむ。なら責任被ってもらおう。

わたしは手早く外套と鎧を脱ぎ、イーグルに手渡した。

「じゃ、頼むわ。絶対にあんた以外の人にやらせちゃ駄目よ？」

じっと目を見て念を押す。イーグルの奴は変な顔をしたが、お風呂の位置を説明すると自分は汚い格好のままにその場から去っていた。

ふん、後で会つのが楽しみだ。何しろあの鎧、それ自体が意思を持っている。持ち主に相応しくないと判断すると火を吹くといういわくつきの代物なのだ。

イーグルに魔力はないし、そんな状態で汚れを落とそうとすれば鎧の気を損ねるのは必至だろう。結果は目に見えている。

「さてと」

案内されたお風呂場に直行し、わたしは存分に体を洗った。

お風呂から上がると、更衣室のところには目の細い女の子が二人、わたしが出てくるのを待っていた。極東の島イザナギの人達が着るような淡い黄色の着物に、スカートのようなヒラヒラした白い薄衣を身につけている。頭は町中の人と大した変わりはない。向かって右側の子は一つにまとめていて、もう片方の子は二つにまとめてい

た。ただ、町中の人とちょっと違うのはお団子にまとめたところから、少しだけ髪を垂らしているところだ。

不意に現れたので一瞬ギョツとしたが、恐らくイーグルが頼んでくれた子達だろう。見ると、お団子が一つの方の子は替えの服らしきものを両手に捧げ持っている。納得するとわたしは警戒を解いた。

「レン＝シユミット様ですか？」

「レン＝シユミット様ですね？」

「ええ、そうよ」

わたしが頷くと、二人はニイッと笑った。

「お着替え、手伝うです」

「手伝うです」

舌足らずな言葉でそう告げると、二人の女の子達はわたしの側に近づいて来て、目を見張るかのようなスピードで、有無を言わせず自分達と同じような服を着付けていった。

「髪が短いです」

「かつらを使うです。今、取ってくるです」

クルクルとよく動く二人の姿は見ていて可愛いものだった。

二人とも請け負った仕事に対し、真剣そのものといった態度だ。けれど、

「いい、いい。そこまでしなくても」

二人は服の着替えが終わると今度は髪を気にし始めた。さすがにそこまでしてもらう必要はないため、わたしは慌てて二人を止めた。すると、女の子達は残念そうに眉を寄せた。

「そうですか」

「仕方ないです」

しょんぼりと肩を落とす二人。わたしはそんな二人に笑いかけて礼を言った。

「これで十分。ありがとね。ところで、イーグルのどこまで連れていってくれないかな？ ここに来たのは初めてだから、道がわからないの」

「あい。わかったです」

女の子達はわたしからそう頼まれるとすぐに元気を取り戻し、先頭を切って歩き始めた。わたしが自分の服を持って行こうとすると、二人はそれを制止した。

「また汚れちゃうです」

「後で洗って届けるです」

確かにそれはそうなので、わたしは二人の申し出を受けることにした。

「それじゃ頼むわ。そういえば、あんた達の名前は？」

「私、櫻えい言いつです」

お団子が一つの方の子がそう告げる。ちなみに名前のとおり、そのお団子をくるんでいる布は薄紅色だ。

「私、柳やないうです」

もう片方の子がそう続ける。想像は付くだろうけど、こっちのお団子の色は薄い黄緑色。

「櫻に柳ね」

薄暗い廊下から抜け出すと、部屋の中に差し込む光で一瞬目がくらんだ。その光に慣れてきてからわたしは部屋の中を見回した。

「ここは？」

がらくたが山のように置いてある部屋だった。背後で柳が通り抜けた穴の上にすのこを立てかける。わたし達はどうやら壁の裏の抜け道を通ってきたらしい。

「物置部屋です。イーグル、水汲み場にいる言っただです」

「レン＝シュミット様は応接間にご案内するよう言われたです」

櫻と柳が交互にそう教える。わたしは「そう」と頷いて、先を歩く櫻の後についていった。

櫻と柳が去って行き、応接間で待つこと十分弱。今、わたしの目の前には腕に火傷を負って、むすっとした顔をしたイーグルと、その相棒のクロウという二枚目のお兄さんがいる。

服装はイーグルとほぼ同じ。まあ、同じ仕事についているんだから当然か。背も高く、髪も瞳もグレイ、という渋い風体だけど、表情は硬い。

「イーグル、お前はいつまで子供のようなことを言っているのだ」
クロウはそう言ってさつきからずつとイーグルのことをたしなめている。見てくれの鉄面皮に似合わず案外世話好きだな、この人。
「だって、この間こいつに負わされた火傷がようやく直った……と思ったらこれだぜ？」

と言つて氷嚢で冷やしていた利き手をグイツとわたしに見せつけるイーグル。

「こいつだつて仮にも女だ。あんな抜け道を使ったお前も悪い」
ん？ 何か引つかかる言い方だな。

「クロウ、仮にもつてどういうこと？」

「言葉のあやだ」

すんなり切り返され、わたしは肩をすくめた。何か釈然としない。
「これ、役に立たなかつたわね」

荷物の中から以前、イーグルからもらった紹介状を取り出す。

「せっかく遊びに着て見ればゴミの洗礼は受けるし」

嫌みだつて？ 嫌みを言つて何が悪い。髪の毛だつて洗うの、苦労したんだから。

「そ、それは……」

ぐうつと言葉を呑むイーグル。代わりにクロウが頭を下げた。

「すまなかつた。こいつはまだ未熟者でな」

クロウのフォローにイーグルはぷいっと横を向いた。未熟者つて言われて機嫌を損ねているようじゃまだまだだな。

「ところであんた達のご主人は？ ここ、夜湖つて人のお屋敷なんでしょ？」

応接間を見渡す。中央に置かれた円卓にはわたしとクロウとイーグルが腰をかけているほかには誰もいなかった。部屋の内装も何だかパツとしない。手入れが行き届かなくてそこここにホコリが落ち

ていたりする。はつきり言って、うらびれた感じが否めない。

「夜湖様に会いに来たのか？」

クロウはそこで言葉を濁した。が、ここぞとばかりにイーグルが口を挟んだ。

「夜湖なんかに会いたいのか？ お前。頭、大丈夫か？」

何！？ お前がここに連れて来たんだろうがっ。

色めきたって椅子から立ち上がりかけたとき、イーグルが不意に何かいいことを思いついたような顔をした。

「そうだ、お前。それなら俺の利き手をダメにした代償として、こいつが回復するまで夜湖の警固、手伝え」

「……えっ？」

思わず目が点になった。次の瞬間、言葉の意味を理解する。

「それもそうだな」

クロウも納得顔。こらこら、勝手に話を進めるんじゃない。

「ちよっ」

言葉を返そうとした丁度そのとき、部屋の扉が開かれた。

「イーグル、クロウ、こちらがレン・シュミットさんアルか？」

両開きの扉の向こうには糸目の男が立っていた。体つきはそれほどガッチリはしていない。

「お人形さんのようにかわいい人アルね。気に入ったアル」

細目をなおも細めて、浅葱色の、貫頭衣と着流しを足し二つに割ったような服を着た男は言った。頭のお団子は一つで、櫻や柳と同じように髪を少し垂らしている。

「お、お人形さん……」

前にイーグル達から夜湖さんのことについて、少し聞いたことがある。お気に入りの人形を壊されたというだけで刺客を差し向けるほどの人形愛好家だ、と。……と言うよりも人形フェチ？ いや、人形マニアと言ったほうがしっくりきそうだ。

と、そんなことをぼんやり考えているうちに夜湖さんはわたしに近付き、腰をかがめた。

「シュミットさん、もしよかったら私のお人形さんになってほしいアルよ」

「はあ？」

「や、夜湖！」

イーグルが慌てて上ずった声を上げた。

わたしはうるんげな目つきで相手を見た。夜湖って……もしかしてすんごい危ない奴じゃないか？

「夜湖様、彼女にはすでにお相手の方がいます。どうかそれだけは思い止どまられるよう」

クロウがあわてて夜湖を止める。

そうそう、ちゃんと主人の手綱を握っていてくれ。心臓に悪い。

「冗談アルよ。私が人を驚かすのが好きなこと、忘れたアルか？」
それって悪趣味っていわないか？

「冗談ならもつとそれらしくしてくれよ」

イーグルもクロウもそれを聞いて胸を撫で下ろした。あきらかに面倒ごとに巻き込まれずにホッとしたようだった。

「そうアルか。シュミットさんには恋人がいるアルか」

隣の椅子に腰掛けて、夜湖さんは前で組んでいた手を膝の上に置いた。

「別にあいつは恋人ってわけじゃ……」

わたしはそれを即座に否定した。だが、

「否定せずともよい」

クロウの奴は完全に誤解していて、わたしは本気で否定してるのに受け入れてくれなかった。そういえば、クロウもイーグルもハーディーがわたしに抱きつく現場を見てたっけ。

「あの恥ずかしい男と筋肉質の男、今日はお前と一緒にじゃねえのか？」

イーグルの問いかけに、わたしはさらっと答えた。

「町において来たわ」

するとクロウとイーグルの方が顔を引きつらせた。

「魔族をか？ ……おい、クロウ。もし奴らが日泉に拾われでもしたら」

「うむ。厄介なことになるな」

何やら深刻そうな顔で頷きあう二人。

「日泉？ あんた、さつきも言ってたけど日泉って誰？」

「それには私が答えるネ。日泉とは私の不祥なる弟のことヨ」

夜湖さんはテーブルの上に置かれていた茶器の中から桃マンを一つ手に取ると続けた。

「弟さん、ねえ。兄弟喧嘩でどうして隠密まで動かしてるのよ？」

冷めかけたお茶を飲みながら、同じようにわたしも桃マンに手を伸ばす。と、夜湖さんはその眸を開いてじっとわたしの顔を見つめた。わたしはその眸の光彩が縦なことあつて、ちよこつとだけ身を引いた。猫みたいな人だな。

「日泉が狙っているのは我が家の家宝、象のぬいぐるみアル」

象のぬいぐるみって……

「我が家は代々人形使いとして地位を築いてきたアル。中でも、その象のぬいぐるみは特別なものネ。ご先祖様はそのぬいぐるみを使ってこの国の平和を守ったヨ。由緒ある逸品アルよ」

夜湖さんはそう言つて胸を張つて見せた。象のぬいぐるみに守られた国か。うーん、きつと海炎の参謀はその歴史を史実から削除したかつただろうな……

「ところがネ。日泉はこともあろうか、私の譲り受けた象のぬいぐるみの目に使われている一対の翡翠を渡せと言つてきたアル。私がそんなことはできないと断つたら喧嘩が始まつたアルよ」

何というか……クロウやイーグルが気の毒に思えてきた。そんなことで命の取り合いをさせられてるのか。

「わかつたわ。仕方ないから力貸してあげる。あんたの腕のことなんて知つたこつちやないけど、駄目になつた服のお金くらい払つてくれるんでしょ？」

「それくらいお安い御用ネ」

夜湖さんはそう言って立ち上がった。

「そうと決まれば象のぬいぐるみを見せておくネ。こっちに来てほしいアル」

わたしは素直に頷いて夜湖さんの後ろについていった。

2・消えた象のぬいぐるみ

案内された宝物庫はいやに暗かった。窓はカーテンで閉ざされ、その透き間から漏れている日光によって、辛うじて足元がわかるくらい。一歩進むたびに闇の中で何かキラリ、キラリと光る。

「いやに暗いのね」

思ったことを言葉にすると、夜湖さんが答えを返してきた。

「日の光に当たると色が褪せるアルよ。我が家にはおよそ12、000体の人形が保管されているネ」

「つてことは、このキラキラ光ってるのは……全部人形の目!？」

「そうネ」

背筋がゾツとしてわたしは身を縮めた。ものには限度というものがあるだろうがっ!

「何千年もの前のアンティークから現在に至るまで、あらゆる人形を世界中から集めてあるヨ。中には目から血の涙を流すものから髪が伸びるものまで」

なくともいいわっ!

「それよりその象のぬいぐるみつてのはどれなの? こっつ暗くちや、何が何やらわかんないわよ」

「間違えたアル。こっちの宝物庫ではなかったネ」

まだこんな所がいくつかあるのか……

「夜湖様……あれは昨日、夜湖様ご自身が抱いてお休みになつていらしたではありませんか」

宝物庫の外でクロウがこめかみを押さえながら言った。

「自慢したいならそう言えばいいのによ」

続いて投げやりっぽく言うイーグル。まあ、気持ちにはわかる。

「二人とも私に仕える身でありながら意地悪アルよ」

ちよっと拗ねたように言う夜湖さん。何かやたらと気疲れする。

「ということで部屋に戻るネ。アイヤー、すまなかつたアル」

しっかりしてくれ。

わたしはイーグル達と顔を見合わせると肩をすくめた。

で、今度こそわたしは象のぬいぐるみと対面した。それは布張りの、所々に繕った跡のある両手で包み込めるくらいの大さのぬいぐるみだった。灰色だったはずの布地は茶色く変色している。ただ、その瞳だけは依然美しいままだ。落ち着いた緑色の宝石で、細かな内包物によって象の優しい視線を余すところなく伝えていた。

「日泉は鉱物マニアなのネ。我が家の人間にあるまじきことヨ」
人形マニアよりはマシだと思っぞ？

「でもさ、このぬいぐるみ。小さすぎるんじゃない？ この国を救ったにしては」

「それは全く問題ないアル。ちょっと離れて見ているネ」

そう言っつてわたしから象を受け取ると夜湖さんは片手で印を結んで何やら唱え始めた。

「おい、本当に離れておいた方がいぞ？」

わたしがその様子をまじまじと見ていたら、クロウがそんな警告をした。

わたしはとりあえず相手の言うことを聞いて後ろに下がった。と同時に詠唱が終わる。夜湖さんはサツと袖からお札のようなものを取り出した。ポウツと一瞬にしてそれは燃え、灰に変わった。

「んな！？」

「ずずずん、とぬいぐるみが大きくなる。天井を破り、それは勝手に歩き始めた。」

「アイヤー、大きくなり過ぎたネ」

夜湖さんはそう言っつて、もう一度術を唱えて札を取り出そうとした。が、

「こ、困ったアル。お札がきれてるネ」

「ば、ばかたれっ。ちゃんと自分の商売道具ぐらい管理しとけっ！」

「クロウ、イーグル。私はお札を作るネ。その間頼むアルよ」

無責任にそう言うと、夜湖さんは自分の机に向かった。悠長というか何というか……

「レン＝シュミット。この象、どうしたら良いと思う?」

呆れ笑いを浮かべながらイーグルがわたしに問いかける。

「わたしに聞かないでよ」

そうこうしている間に象のぬいぐるみは一步前進した。

ズドオオオオオオオン!!

すさまじい縦揺れと、打ち上げ花火の音よりも大きな音がわたし達を襲う。何とかしようとしてもどうにもできない。というか、手をだそうものなら踏み潰されかねない。

「あれ? あの象、さっきの宝物庫の方に行くわね」

そう、二歩、三歩と歩を進める象の道筋の上には先程わたし達が出て来た宝物庫があった。

「それは本当アルか!？」

夜湖さんはあわててお札を書き上げると、今度こそ象を元の大きさに戻すことに成功した。象は空気を抜かれた風船のようにシユルシユルとしぼむと終いにはポテツと地面に落ちた。

「アイヤー、大丈夫アルかあ!？」

象のぬいぐるみの落ちた辺りに駆け出す夜湖さん。わたしもクロウモイーグルもそれをポカン、とした顔で見送った。

「なんかさ、生きるの疲れない?」

わたしがそう言うと、二人ともがっくりと肩を落とした。

「アイヤアアアアアアア!？」

ところが、勢いよく駆け出した夜湖さんだっただけで、現場に着いたとたん断末魔のような雄叫びを上げた。

「いない、いないアル!」

象が踏み荒らした跡をそこらじゅう転々と捜し回ってから、夜湖さんは半べそかいてこちらを見た。

「私のイルザがないアルう」

……あのぬいぐるみに名前付けてたのか。

まあ、人の趣味をとやかく言いたくはないけど、外見からすると……二十歳を越えた男がぬいぐるみ一つに右往左往する姿は正直滑稽に見える。

「はいはい。じゃ、わたしはこっち探すから、イーグルはあっち、クロウはそっちを探して」

「わかった」

溜め息交じりに頷く二人と同じく、わたしは苦笑いを浮かべた。
ホントに何が悲しくて……

「シユミットさん、本当にすまないアル」

しよぼくれた表情で謝る夜湖さん。どうもこの人、憎めないな。

「いいわよ、そんなこと。夜湖さん、あんたはお札をもう二枚用意してきて」

「お札を、アルか？」

夜湖さんの悲しみにくれた顔がキョトンとしたもの変わる。

「そつ。もう一度大きくして、またすぐに元に戻せば探す手間も省けるでしょ？」

「わかったアル」

即座に顔に広がった喜びの色に、わたしは再度苦笑した。

駆け足で自室に戻って行く夜湖さんを振り返ることなく、わたしは『イルザ』捜しを開始したのであった。

3・日泉の野望

夜である。

結局あの後、象のぬいぐるみ『イルザ』は見つからなかった。夜湖さんはかなり傷心だったご様子。今日は隣国の王からの贈られたお気に入りのぬいぐるみ、パンダの『カンカン』を抱いて眠るらしい。傷心を癒すために。

わたしは、と言うと夜湖さんから一室を貸し与えてもらって、今はその部屋にいる。お香の匂いがふわわんと香る中、わたしは綴じそうになる臉をなんとか上に押し上げながら『イルザ』のことを考えていた。

あのととき、夜湖さんが象を元の大きさに戻して駆けつけた時間はあまり長くなかった。つまり、イルザは短時間に消えたことになる。そのことから考えると、誰かがぬいぐるみを奪い去ったとは考えにくい。ある可能性を除いては。でも、

「って、こんなくならない兄弟喧嘩に魔族が関わってるはずないかいや、待てよ？」

そういえば珍しいことに、ハーディーもゼンも、別れてから一度も姿を見せていない。普段はあれほどしつこく付きまとってくるハーディーがこれだけ姿を現さないと……ちょっと気になるな。嬢ちゃん、夜分にすまん。ここか？」

「ゼン、どうしたの？」

扉越しに声が聞こえた。そのまま話すのも何だから中に入れる。と、ゼンの奴は顔を赤らめながらわたしの姿をジロジロと見た。

「何よ」

「いや、そういう姿もいいなあ……と思って」

「いいながら口元に手をやるゼン。」

「ああ、この格好のことね。これにはちよっと事情があって」

て、こんな時間に訪ねてくるなんて何かあったの？」

「それがだな、あの後ハルディクスが日泉という奴に付き従っていてな。面白いと思わないか？ あの男が他人にへりくだっているなんて……ん？ 嬢ちゃん？」

わたしが頭を抱えたのを見て、ゼンが不思議そうに首をかしげる。案の定と言うか、何と言うか。人の期待を裏切らん奴だよ、あいつは。

「イーグルとクロウのこと、あんた覚えてる？ 日泉は夜湖さんの弟なのよ。今はちょっと確執があるみたいなんだけど」

厄介な事になりそうだなあ。あいつの力の大きさを考えると、敵対するのは得策じゃない。

「で、どうして奴は日泉に従ってるの？ ハーディーのことだから面白がつってって言われても納得するけど」

「それが……俺にもよくわからないのだ」

むう、何か弱みでも握られたのか？ でも、あいつに弱みなんかあるのかなあ。

「ま、いいわ。わざわざありがとね。明日、日泉の所に乗り込むつもりだから奴に手加減しろって言っという。念のため、日泉には悟られないようにしてくれるとありがたいわ」

「何故だ？ 日泉についたってことは奴は敵だってことじゃないか。やっぱり嬢ちゃんはハルディクスのことを……」

急に真顔になるゼン。わたしはゆっくり首を横に振った。

「ゼン、あんたまで勘違いしちゃ困るわ。わたしは単に奴と敵対したくないだけ。あんな桁外れに強い奴、敵に回したらこっちの命が危ないもの」

「俺が死んでも守る」

真っ直ぐ見つめる赤い瞳にちょっと押されながら、わたしは肩をすくめた。

「バカタレ。こんなことで一々死んだりしてたら、命が幾つあっても足りないわよ。大体あんた、魔族なんだから死ぬって言うよりも、

消滅するって言った方が正しいんじゃない？」

「嬢ちゃん……それはいくらなんでも冷たいよ」

自分から言い出したんでしょ。ベそかくな。

「ところで、行ってくれるの？ それとも行ってくれないの？」

確認すると、ゼンは慌てて答えた。

「行く行く、行かせてもらう。俺だって嬢ちゃんの役に立つことは嬉しいんだ。ハルディクス言葉を借りるようで癪だけだな」

そこまでハーディーにこだわらなくてもいいのに。ゼンにはゼンの良いところがあるんだけどなあ。まあ、わざわざ口に出すようなことじゃないか。

「頼むわよ」

ゼンが姿を消すのを見届ける。

あいつが関わっているなら、多分イルザは日泉の手に落ちたのだろう。きっと明日は色んな意味で騒がしい日になるに違いない。

そう思って、わたしはげんなりと肩を落とした。

翌日。

この日は朝からどんよりとした雲の立ち込める天気だった。今にも雨が降り出しそうで、まるで今の夜湖さんの心境を写し取ったかのような。

「もう駄目アル。きつとイルザは瞳をくりぬかれて……アイヤーツ！ 可哀想アルう」

頭を抱えて悶える夜湖さん。周りにいるわたし、ゼン、イーグル、クロウは呆然としている。そんな中、ゼンがポツリとこんなことを言った。

「こいつ、あまり係わり合いにならない方がよくないか？」

わたしを端とする他二名も大きく頷いた。

「ま、そんなことはどうでもいいとして、さっさと日泉のそこに行かない？ こんなところで悩んでたって始まらないんだから」

「……わかってるネ。ちゃんと用意はしてあるヨ」

と、背中に背負ったリュックを見せる夜湖さん。その口からはパ
ンダのカンカンの手が見出ししている。

「他にもこれだけあるネ」

袖から出した両手の指には、一握り大のマスコットが指の数だけ
ぶら下がっていた。

「右から兎のルカ、亀のラン、猫のヨリ、熊の……」

「もういい、もういいわ」

まだまだ紹介し足りなさそうだったけど途中でさえぎる。このま
ま放っておくと際限なく紹介を続けそうだ。

夜湖さんは渋々それらをしまった。

「で、あっちには面倒なことにハーディーの奴が味方してるんだけ
ど、何か勝算はある？ 無駄死にはしたくないわ」

ゼンは戻ってきた時こう言っていた。

ハーディーの奴には何やら事情があるらしい、と。

「日泉の弱みならたくさん握っているアル」

うーん、でもそれって役に立つのか？

「ま、いいわ。けど……この一件、単に翡翠だけの問題じゃないわ
ね？ あの翡翠、確かに上物だったようだけど、収集家が目の色を
変えて欲しがるほどのものじゃなかった。第一、小さすぎるもの」

わたしがそう指摘すると、夜湖さんは悪戯が見つかった子ども
のように頂垂れた。

「アイヤー、シュミットさんは気づいてしまったアルか。そうアル。
あの翡翠には秘密があるネ」

「そんなこと一言も……」

イーグルが食ってかかる。ま、真実を教えられずに働かされるの
は、あまり気持ちのいいもんじゃないからなあ。イーグルが腹を立
てるのも無理もない。

「すまなかつたアル。『この事は内密に』と死んだ父上に言われて
いたネ。この家を継ぐ者だけが口伝で教えられることアルよ」

あっさりと謝る夜湖さん。

「それを夜湖さんは弟の日泉にも教えてしまったのね」

「そうネ。日泉を信用した私がバカだったアルよ。以来、私は口伝の鍵となるイルザから目を離さないようにしていたアル。けれどイルザは……ああ！ イルザっ、イルザぁ」

まったくもう。人に頼み事をするなら最初から隠し事なんかしないでよね。

「で、日泉はどこにいるの？」

「カジヤル海の近くに使っていない別荘があるネ」

というわけで、早速わたし達はその別荘とやらに向かった。

もちろん、意気込んでいたのは夜湖さんだけだったのは言うまでもない。

移動手段は地道に徒歩となった。

少し離れているとはいえ、別荘が同じ街の郊外にあったこともある。こんなことにゼンの力をわざわざ借りるまでもない。

「ここ？ なんかいやに寂れたところね」

薄暗くぼろっちい屋敷が、人家もまばらな場所にポツンと建っていた。白亜の壁は見る影もないほど煤けていて、朱色に塗られていたはずの柱の塗料は剥げちよびれている。青い瓦の屋根はどこどころに穴が空き、雑草や苔などの培地になっていた。

「人形使いの一族は平和な時代が来てからはあまり責ばれなくなつたアル。最近は主上からもあまりお声がかからなくなったネ。数々の別荘を充分に管理するだけの財産はもうないアルよ」

そういえば本宅もやけにうらびれてたなあ。

「人形を売ればよかつたんじゃないの？ アンティークのものもあるならそれなりに値段が付きそうだし、背に腹は代えられないでしょ」

わたしがそう提案すると、夜湖さんはとんでもないと言わんばかりに首を振った。

「アイヤー、それはできないアル。人形は我が一族にとって家族も

同然ネ。家族を売ることはできないアルよ。にもかかわらず、日泉は口伝を聞いてイルザの目をくりぬこうとしたネ。これは許せない事アル」

真剣に切々と訴えかける夜湖さん。まあ、理解はできないけれど、彼にとつて一大事であることはよくわかった。

「で、その口伝ってのは何なの？　ここまで来たら話してもらおうよ？」

「……本当に金に困ったなら象の眼を光に透かすアル。すると、財宝が埋められている地図が浮かぶのだそうネ。日泉は財宝を狙ってイルザの瞳を欲しがったアル」

財宝が眠る場所が記されているのか。意地を張らずに、それ掘り返したらいいのに。わたしだったらきつと日泉と同じことをしたと思うなあ。

「でも夜湖様、つい先月、北区の別宅を売ったばかりではありませんか。その半分は日泉様にお譲りになったはずでは」

クロウが横から口を挟む。すると、夜湖さんは口を尖らせた。

「ちゃんと渡したネ。でも、日泉はそれをすぐに鉱物に換えてしまったアルよ」

うーん……日泉も計画性がなさそうだなあ。

「わかりました。ところで、夜湖様の取り分はどうされましたか？　静かに尋ねたクロウに対し、夜湖さんの表情が固まった。その様子を見て、イーグルが「おいおい」とぼやく。

「まさか私達がガルディナに行っている間に、また人形を買い足したんですか？」

クロウのこめかみの辺りがピクッと神経質そうに動いた。

「し、仕方がないアルよ。これには深い事情があるネ」

「どうせ競売に欲しかった人形が出てたとかだろ」

イーグルの言葉に夜湖さんは押し黙った。

「どうりでおかしいと思っただよ。帰って来てみれば以前働いてた奴らはほとんどいなくなってるし、給料は減らされるし……」

「ははは。お気の毒としか言いようがない。」

「まあ、何というか……元氣出せよ」

それまで様子を見ていたゼンが言いにくそうにそう告げると、イグルとクロウは互いに顔を見合わせ、ほぼ同じタイミングで肩を落とした。

一段落付くと、わたし達はその屋敷の中に乗り込んで行った。行ったまでは良かったんだけど……

「何これ。ホントにこんなところに日泉がいるの？」

中はクモの巣だらけだった。まるで何年も人が足を踏み入れたことがないように見える。頭に吸い付いてくる白い糸状のそれを払いのけながら聞くと、クロウがコクリと頷いて見せた。

「日泉の密偵がここに入りに出入りしているのは幾度か見ている」

まあ、そういうことなら気は進まないけど探すか。でも、こんなところを埃まみれになりながら歩き回るのは嫌だな。

そう思っただけの辺りの気配を探る。と、余りにも簡単になじみの妖気は見つかった。ハーディーの気配だ。

「いた。こつち」

どうやら奴はわたしの言付けを聞き入れてくれたらしい。普段はこんな風に自分から魔力を漂わせたりしないしね。

「ここよ」

かなり痛みの激しい、風通しの良さそうな薑製の扉の前に立ってわたしはそう宣言した。つま先から這い上がってくるような寒気が全身を包む。扉の向こうから漏れ出てくる魔力は人を不安の底無し沼に引きずり込むようだった。

息を飲み、扉を開ける。蝶番は錆びていたが、それは思った以上に楽に開いた。

壁一面に天井まで届く棚が設えられた空間がそこには広がっていた。棚のどれも幾つもの標本箱が並べられ、さらにその一つ一つの枠の中には様々な鉱物が収められている。窓から漏れる日光に反射し、それらはキラキラと硬質的な光を床へ、天井へと投げかけて

いた。

ええつと……どこかで見たような光景だな。

「おやおや、これはこれは。兄さんじゃないアルか」

日泉と思われる男は侵入者に気付くや否や、そう声をかけた。部屋の一歩奥のデスクの上に座っていたその男の後ろには不敵な笑みを浮かべたハーディーが立っている。

「あんたが日泉ね」

格好は夜湖さんとあまり変わりはない。顔も結構似てるから見分けにくい、と言えば見分けにくい。ただ、髪はお団子にはせず、三つ編みにしていた。

「そうネ。そういうお前は誰アルか」

横から口を出されて、日泉が目を眇める。

「ん……まあ、一応夜湖さんの護衛？」

素直に答えると、日泉は警戒心をあらわにした。

「ムム！ さてはぬいぐるみを取り返しにきたアルね！？ ハルデイクス、こいつらを束縛するアル！」

敵と認識するや否や、日泉さんはビシッとわたし達を指差した。

自分から自供するなんて間抜けにもほどがある。けれど、何とゆうか、一々動作が芝居がかっていて、段々どうでもよくなってきた。

そんなわたしにはお構いなく、ハーディーは日泉の前に進み出た。

「レンちゃん、その格好……可愛い 食べちゃいたいくらい」
……もう嫌。こいつと付き合うの。

「あんたは今現在わたしの敵なの。寝返るなら今よ。でも、そのつもりがないなら気安く声かけないでよね」

白けながら相手を睨みつけると、ハーディーは何か思いついたように口の端を歪めた。

「敵同士っていうのもなかなか燃えるシチュエーションだよな」

まるで事の黒幕であるかのようにゆったり近付くハーディー。奴は妖しい笑みを湛えながらわたしの頰をつかんだ。静電気が起きたように、肌に軽い痺れが走る。

「ふざけないで。さつさと目を覚ましてもらおうよ」

けれどわたしは奴の手を振り払い、腰の短剣を抜いた。本気でやりあおうとは思わないが、多少お灸を据えるくらいはしたほうがいい気がする。

「ハルデイクス、貴様の好きにはさせん」

がしかし、その言葉を真に受けてゼンがわたしをかばうように前に出た。

ちよつと待て。こんなところでハーディーとゼンがぶつかり合ったりしたら、こんな屋敷、藁小屋同然だ。

「ストップ！ 本気で殺りあつたりしないですよ！？」

慌てて止めると、日泉がクツクツと喉を震わせて嗤った。

「安心するアル。殺しはしないネ。ただ、私が財宝を掘り出すのを黙って見ていて欲しいだけヨ」

自身の圧倒的有利を感じてか、その表情は余裕に満ちていた。すると、そんな日泉の態度を見て我慢の限界に達したらしい夜湖さんが、突然床をダンツと踏み鳴らした。

「日泉、お前は何故そうアルか！ 人形使いの一族に生まれた者として、してはいいことといけないことがあるヨ」

眉尻を吊り上げ、声を荒立てる夜湖さん。ところが日泉にその訴えは届かなかつた。

「だったら口伝は何のために伝えられてきたアルか」

「まだ私達には生きていけるだけの余裕があるネ。鉱物を収集するためだけに楽しんで金を得ようとするその根性、私はそれが許せないアルよ」

矢継ぎ早に反論した夜湖さんに対し、日泉は一步も引かなかつた。

「兄さんは自分ばかり人形を買っているじゃないアルか！ 次から次へとよく飽きないものネ」

憤然と言い放ち、日泉は飾り棚を指さした。

「私のコレクションなんて兄さんに比べれば微々たるものヨ」

……こいつらがやってるの、単なる兄弟喧嘩だな。

「何を言うアルか。人形使いが人形を買い集めて何が悪いネ。お前こそ、一体幾らその石ころに費やしたアルか！ 甚だ情けないアル」その言葉でとうとう日泉は切れたようだった。

「ハルデイクス！ 何してるアルかっ！！」

日泉の叱責が飛ぶ。その言葉にあからさまに不快感を示しながらもハーディーは「ハイハイ」と投げやりならえを返した。

どういった経緯でこいつが日泉の言うことを聞いているのかは知らないけど、その原因が解決した後、かなり怖いことが起こりそうな気がする。

「ということだから、レンちゃん。ちよつとの間、我慢しててね？」笑顔にもかかわらずピリピリとした空気を纏わせながらどこからともなくロープを取り出すハーディー。

わたしは逆らわなかった。逆らって下手に怪我をするのも馬鹿らしい。たかが兄弟喧嘩に巻き込まれただけなのに。

「あんた達も怪我したくなかったら素直に縛ってもらった方が徳よ？」

で、わたしたちはかなりあっさりと捕まった。まあ、ゼンや夜湖さんはかなり抵抗したけど。

「な、何か張り合いがないアルね……ま、いいアル。兄さん、これが何か分かるアルか？」

懐からなにやら取り出し、日泉はそれをわたし達に見せ付けた。

親指と人差し指でつまみ上げられたそれは美しい碧色に輝いている。

「家宝の象の人形の目に使われていた翡翠アル」

「な、なんて事を……」

がつくりと肩を落とす夜湖さんには構わず、日泉はそれを卓上にある拡大鏡の台座に乗せた。

「折角だから兄さんにも見せてあげるアルよ」

台座の傾きを調整し、白い紙をその下に敷く日泉。付属のライトを点灯すると、淡い緑色の光が紙の上に落ちた。

「ん？ インクルージョン（内包物）とは別に透かし彫りがあるネ」

まとめて縛り上げられたまま、わたし達は机の上の拡大鏡を覗き込んだ。映し出された緑色の影の中には屋敷の間取り図と思しき線画と、何かを記す濃い藍の点が見て取れた。

「これが財宝の在り処アルか。今から一緒に行って埋められたものを暴くネ。さぞかし兄さんは悔しいアルよ」

クヒヒヒヒ、と笑う日泉。夜湖さんはと言うと、

「許さないアル。イルザの瞳を元に戻すネ」

未だ意見は変わらないご様子。この人も相当頑固だなあ。

「ねえ、ハーディー。あんたどうして日泉なんかについてるわけ？」

兄弟の口論がまた始まったので、わたしはハーディーに疑問に思っていたことを尋ねた。

「それはね、レンチャンがあまりにもつれないからさ。待つ恋もいけれど、奪う恋の方がロマンチックでしょ」

真面目に話せ。ほら、またイーグルとクロウが変な目でわたしを見てるじゃないか。

「ハルディクス、貴様」

ゼンが何かを言いかけたが、その言葉はハーディーの言葉によって遮られた。

「俺はゼンみたいに余裕がないわけじゃないけど、できるだけ一緒にいる時間を楽しみたいしね」

で、あんなことやこんなことをするわけか。いい迷惑なんだけど。

「冗談はさておき、ホントのところはどうしたの？」

「冗談だなんて、俺はいつだって真剣なのにつれないなあ。でも、それはな・い・しよ」

言いながらつつんとわたしの鼻の頭をつつくハーディー。ホント、色々といラつく奴だ。

「アイヤー、そっちで何話しているアルか！ ハルディクス、屋敷に皆を運ぶネ。兄さんが守ったものを目の前で暴いてやるアル！」

「はいはい」

ハルディクスは再び嫌々返事をする、その場にいた面々を屋敷

に移動させた。

ま、そんなこんなでわたし達は夜湖さんの家へと戻ったのであった。

地図の指し示す場所、それはちょうどわたしの泊まった部屋のすぐ前にある庭の辺りだった。特に目立つような風景ではなかったけれど、アクセントとして置かれていた石の周辺に日泉は目星をつけてそこを掘り出した。

何分が何十分になり、何十分が何時間になり、わたし達が雑談で盛り上がっていたとき、唐突に日泉の「あつたアルっ！」と言う声が辺りに轟いた。

「これアルね。この箱の中に……」

現れ出たのは革張りのしつかりした造りの箱だった。補強の金具が既に腐食し始めていることから、かなり古いものであることがわかる。

「鍵は……こんなもの、すぐに壊れるネ」

日泉はそう言って手近にあった石を拾い上げると箱についていた鍵を叩き壊した。箱についていた鋼の錠前は脆くなっていて、簡単に壊れて地面に落ちた。

「日泉、やめるアル！」

夜湖さんが悲痛な声でそれを止める。けれど、身を乗り出しているところを見ると人一倍、中身が気になるようでもある。

「もう、遅いアルよ」

日泉は箱をわざとらしくゆっくりとした動作で開けた。蓋の裏に張られた赤いビロードの布がいやに眩しく目を射る。

「な……こ、これは……」

日泉の期待に膨らんでいた体の傾きが、失望のそれへと変わる。

日泉が手にしたものはよく見ないでもそれとわかった。

「人形アルか！」

夜湖さんの顔にくつと赤みが増す。これだけ反対していながらも、

ただ中身が人形だったというだけでこれだ。何か非常に気が抜けてしまった。

「日泉さん、俺の宝物返してくれる？」

この機に乗じてハーディーがそんなことを日泉に言った。日泉の方はシヨックのあまりに易々とハーディーの言うところの『宝物』を奴に返した。

「ハーディー、あんたは腹が立つてるだろうけど、これ以上不幸にするのは日泉が気の毒だし、我慢しといてあげたら？」

「……ん？ いいよ。俺はこいつが取り戻せただけで大満足だもん」と言つて、小さなお守り袋を見せるハーディー。

「何それ」

「戻ってきたから教えてあげる。これにはちょっと前にレンちゃんからもらった四ツ葉のクローバーが……ほら、ね？」

取り出して、押し花状態になっているクローバーをさも愛しそうにまた元に戻すハーディー。そういえば前にあげたことがあったわけ。

「『言うこと聞かなきゃ握り潰す』なんて言うんだもん。俺、不本意だけどレンの敵に回るしかなかったんだ」

そこですかさず抱き着いてくるハーディー。お決まりの動作だったので、わたしはこれをヒョイとよけた。

それまでちょこつとだけ感心していたのに一気に興が冷め、わたしは溜め息を一つ吐いた。

「結局、疲れるために海炎に来たつて感じだあ……」

ハーディーに縄の束縛を解いてもらいながらわたしは呟いた。

「……夜湖なんかに会いたいと言ったとき、俺が正気を疑ったのはこういうことだ」

ロープが解かれると同時に箱の方に走り寄って行った夜湖さんの後ろ姿を見て、わたしはもう一度、深い溜め息をつくことになった。

エピソード

外では雨が降っていた。その後、しばらくして天気は雨へと切り替わったのだ。日泉は未だ放心状態で箱の前に座り込んでいる。

かたや夜湖さんは発掘した人形を目を輝かせながら応接室の壁際に並べていた。出土した人形は京戯という夏の伝統芸能に使われる操り人形なのだそうだ。極彩色の錦の着物を着せられたそれは全部で十体あった。夜湖さん曰く、二、三百年ほど前のものから、作成年月が不明のものもあるらしい。

「イルザはどうしたんだよ」

ボソツとイーグルが呟く。と、ハーディーが思い出したようにおもむろに次元の穴を広げた。

「これのこと？」

器用に片手だけ異次元に突っ込み、薄汚れたぬいぐるみを取り出すハーディー。すると『イルザ』の名前に夜湖さんは素早く反応した。

「イルザ、何て姿に……アイヤー、痛々しいネ」

目の辺りにはほつれた糸がチョロンと伸びていた。夜湖さんはすぐさまハーディーからイルザを受け取ると、そのぬいぐるみを優しく手つきで何度も撫で付けた。

「夜湖様、お貸しく下さい。それくらいなら何とかありますから」
「ヤレヤレとでも言いたげに、クロウが手を差し出す。その言葉を聞いて夜湖さんの顔がパツと明るくなったのは言うまでもないだろう。」

そのまま席を外して部屋の外へ出て行くクロウの背中を見送ると、わたしはもう一つ疑問に思っていたことをハーディーに尋ねた。

「で、あんたみたいな奴が何故日泉なんか宝物とやらを盗まれたのよ？」

「だってレン、言ったでしょ？ ゼンとお茶してこいって。実行に

移したら気分が萎えちゃって、萎えちゃって」

肩をすくめてゼンを見るハーディー。その言葉に、いつものようにゼンが食いつく。

「それは俺の台詞だ、ハルディクス！」

ガタンと音を立てて席を立ったゼンをハーディーは鼻で笑った。

「真似しないでくれる？ 猿まね剣山」

「だ、誰が猿まね剣山だ！」

「ゼンに決まってるでしょ」

あー、うるさい奴ら。

冗談を真に受けないでよね。ホントにもう。

「ヤムチャ、召し上がるですか？」

櫻と柳が勧めてくるお茶や点心を口に運びながら、わたしはこいつらとの付き合いをもう一度考え直すべきだな、と堅く心に誓ったのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9165x/>

気ままに行こう！ ss-1 24,000の瞳

2011年10月27日03時30分発行